

編集後記

『哲学の探求』第 45 号が発刊となりました。私の不手際により、例年よりも刊行が遅れましたこと、お詫び申し上げます。今号は、昨年テーマレクチャーを引き受けてくださった高村先生、そして、6人の執筆者の皆様の論文からなります。高村先生、執筆者の皆様には、改めて感謝申し上げます。昨年、当フォーラムに参加された方はもちろん、遠方でなかなか参加できない方にもぜひ手にとっていただければと存じます。

編集にあたっては、私の作業の遅延により、高村先生、執筆者の皆様、そして、協力を申し出ていただいた編集協力者のみなさまに、大変ご迷惑をおかけしました。この場をお借りして深くお詫び申し上げます。また、お詫びとともに、緻密な校正作業にあたっていただいたこと、心から感謝申し上げます。

今回の作業で初めて知ることも多く、執筆者の皆様、編集協力者の皆様から多くを学ばせていただきました。私の力不足で、編集にご協力いただいた皆様のご負担が大きくなってしまったこと、心苦しく思う次第です。

編集作業の中では、前年度編集担当の高取さん、現運営委員の皆様にも、アドバイスをいただきました。そして、編集担当として共に作業した吉田さんには、本当に様々な場面でサポートいただきました。本当にありがとうございました。

今回、校正作業の中で、編集協力者の方からいくつか編集方針に関する貴重なご意見、ご提案もいただきました。いただいたご意見、ご提案をもとに、今回の編集作業を振り返りつつ、次期以降の編集作業に向けて執筆要項等の改定作業を進めております。

今号の発行にあたり、ご協力いただいたみなさまに重ねて感謝申し上げます。今回、編集を担当し、当フォーラムが有志のみなさまの力で成り立っていることを再認識いたしました。誠にありがとうございました。

『哲学の探求』編集担当 丸山 栄治

今回の編集作業においては、本当に多くの方々に、お世話になりました。

まずは、昨年度のテーマレクチャーで講演をしてくださっただけでなく、『哲学の探求』への寄稿までしてくださった、高村夏輝先生をはじめ、今回、ご投稿いただいた、すべての方々に感謝申し上げます。『哲学の探求』は、論文誌ですから、その存続が、第一に、ご投稿いただくみなさまの執筆のご意志にかかっている、ということは、言うまでもありません。

また、今回の編集作業において、率先して、ご協力くださいました、編集協力者の方々にも、深く感謝いたします。私自身、今回、初めて、『哲学の探求』の編集作業に携わることになりましたが、これを終えてまずもった感想といえば、『哲学の探求』の編集作業は、こんなにもたいへんなものだったのか」ということであると同時に、「これだけたいへんな仕事が、毎年、有志だけに基づいて集まっていたいたみなさんのおかげで、成立していたのか」ということでした。哲学若手研究者フォーラムの運営それ自体もそうですが、このような仕方でも、つまり、関係する方々のそれぞれのお気持ちひとつで、個人レベルではない哲学的営みが、存続し、発展していくというのは、たいへん尊いことだと思えます。

加えて、昨年度、編集担当を務められた、高取正大さんにも、任期後であるにもかかわらず、多大なご協力を賜りました。この場をかりて、あらためて、感謝申し上げます。そもそも、今回の編集作業は、高取さんよりいただいた、たいへん丁寧な引継ぎ資料に、多くをおついています。これに加えて、作業の過程で、度重なるご相談にも、その都度、快く応じてくださり、誠実な応答をしてくださいました。今回の作業を通して、高取さんのすばらしい人格を、再認識した次第であります。

最後に、もう一人の編集担当である、丸山さんにも、心より、感謝申し上げます。編集担当に就任したとき、丸山さんとの間で、平等な役割分担をしたつもりでしたが、実際の作業を振り返ると、すべての段階において、丸山さんに主導をお願いし、自分はそれにしがっているだけというような状況がありました。また、私の能力不足から、作業の遅れが生じた際も、丸山さんは、たいへん広い心で、事実を受け止め、冷静に、計画の立て直しを提案してくださ

いました。さんざんご迷惑をおかけしておきながら、誠に勝手な言い回しではございますが、もう一人の編集担当が、丸山さんで、よかったです。本当に、ありがとうございました。

本号の編集の過程で、ありがたいことに、何人かの方から、『哲学の探求』の編集方針などに関して、積極的なご提案をいただきました。これらのご提案については、運営委員会全体で話し合い、目下、来年度以降の編集方針への反映を検討しているところですが、同時に、これをきっかけとして、私個人でも、『哲学の探求』が、若手研究者（ひいては、哲学業界そのもの）にとってどのような存在なのか、あるいは、どのようなものであるべきなのか」ということについて、深く考えるにいたりました。これについての明確な答えが、ここで与えられるわけではないのですが、先のようなご提案をくださる方々が実際にいらっしゃること、そして、たしかに、私自身も、以前、『哲学の探求』に投稿し、貴重な経験をさせていただいたということからも、少なくとも、『哲学の探求』が、若手研究者にとって、一定の重要な役割をにない、一定の関心を集めているということは、信じてよいと思います。これから、この論文誌が、よりよいものになるよう、立場が変わっても、自分なりに、尽力していけたらと思っております。

『哲学の探求』編集担当 吉田 佑介